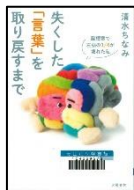


今月の PICK UP



『失くした「言葉」を取り戻すまで』 清水 ちなみ／著 文藝春秋 493.7シ

高血圧の持病を持つ著者がくも膜下出血と診断されたのは46歳の時。幸いにも著者は手術をすることで生きながらえたのですが、左脳の4分の1が壊死しており、言葉を失ってしまいました。手術後に著者が話せた言葉は「お母さん」「わかんない」の2語のみ。過去の記憶もなくし、物の認識も難しい状態となっていました。

入院前後から現在までの様子を、家族や医療関係者の記録・コメントを交えて具体的に記しています。様々なりハビリに挑戦する著者と家族の「今までの自分を取り戻したい」という熱い思いが伝わってきます。

『古典モノ語り』 山本 淳子／著 笠間書院 910.2ヤ



「うつくしきもの 瓜にかきたるちごの顔。」枕草子の一節です。瓜に顔を描く、それはなんのためだったのでしょうか。

古典文学に現れる物や道具には、現代の私達にはどんなものかわからないモノがたくさんあります。そのモノたちはどのように使われ、どんな意味を持っていたのでしょうか。文学作品というタイムカプセルに閉じ込められて届いた、「モノ」に込められた思いを、作品と共に味わってみませんか。

司書の おすすめ



『音声学者、娘とことばの不思議に飛び込む』 川原 繁人／著 朝日出版社 801.1カ

小さい子どもが、みかんを「みたん」、とうもろこしを「とうもころし」など言い間違いをすることがありますね。そのような子どもの言い間違いはなぜ起こるのか？ そもそも我々はどうやって音声を発しているのか？ など、不思議で満ち溢れた言葉について音声学の観点で書かれています。著者自身、本書を「子育てエピソード満載の音声学入門書」と述べているように、著者の二人の娘さんのつぶやき、言い間違いがとにかく可愛く、「我が子もそうだった!」と共感しつつ音声学について楽しく学べる一冊です。



『ヘルンとセツ』 田淵 久美子／著 NHK出版 913.6タ



明治二十三年、紀行作家として来日したラフカディオ・ハーンは生活の為に英語教師となり、島根県松江の尋常中学に手違いの辞令のままヘルンと名乗り赴任します。そこで女中として奉公する元武家の娘セツと出会います。セツは、出雲の民話や怪談の話ヘルンに聞かせ二人はお互いにひかれ始めます。この本の著者は、NHK大河ドラマなど数多くの作品を手掛ける脚本家です。場面の展開が上手く二人の運命を感じる物語になっています。

『南極の食卓』 渡貫 淳子／著 家の光協会 402.9ワ

南極地域観測隊の調理隊員として、昭和基地で30人の調理を担当した女性隊員の体験記。いかにして限られた食材でごみを出さずに調理をするか、またいかにして食を通して隊員の心身の健康をサポートするかなど、南極という厳しい環境下での苦労や知恵が描かれています。

